

【日本海軍と日露戦争】山本五十六と日露戦争

元防衛大学校教授 相澤 淳

1, 海兵 32 期と日露戦争

【関連年譜】

1901年12月	海軍兵学校入校
02年 1月	日英同盟成立
04年 2月	日露戦争開戦（8日旅順口奇襲） （2月24日、3月27日、5月3日 旅順口閉塞作戦）
4月	斎藤七五郎（20期）、正木義太（21期）ら海兵教官
8月	黄海海戦、第1回旅順総攻撃
10月	バルチック艦隊、リバウ出港
11月	海軍兵学校卒業
12月	203高地占領
05年 1月	山本五十六「日進」乗組
3月	奉天会戦
5月	日本海海戦（27～28日）
9月	ポーツマス条約締結

【旅順口閉塞作戦と嶋田繁太郎】（『正木義太伝』）

明治三十七年旅順の閉塞決行後、正木閣下を海軍兵学校教官に迎え、親しく旅順閉塞の御実戦談を拝聴し、高潔なる御人格に接し、全校生徒に与えられたる精神上的御感化の多大なるは、当時一号生徒たりし小生の終生脳裏を去らざる印象に候。

殊に御人格高き斎藤七五郎閣下と御親密にて、御二人揃って天真高雅の御風貌にて、並び歩き談らはれしご様子の美しさは、今も眼に残り居り所に候て、其無言の御教化は、百万冊の精神教科書に優るものにて候。

【旅順口奇襲と山本五十六】「戦備に関する意見」（1941年1月7日）

（作戦方針）

作戦方針に関する従来の研究は是れ亦正常堂々たる邀撃主作戦を対象とするものなり而して累次図演等の示す結果を観るに帝国海軍は未だ一回の大勝を得ることなく此の儘推

移すれば恐くぢり貧に陥るにあらずやと懸念さらるる情勢に於て演習中止となるを恒例とせり

事前戦否の決を採らんが為の資料としてはいざ知らず苟くも一旦開戦と決したる以上如此経過は断じて之を避けざるべからず

日米戦争に於て我の第一に遂行せざるべからざる要項は開戦劈頭敵主力艦隊を猛撃撃破して米国海軍及米国民をして救うべからざる程度に其の志気を阻喪せしむること是なり

(開戦劈頭に於て採るべき主作戦計画要領)

我等は日露戦争に於て幾多の教訓を与えられたり

- (一) 開戦劈頭敵主力艦隊急襲の好機を獲得せること
- (二) 開戦劈頭に於ける我水雷部隊夜襲の実績は遺憾ながら充分ならざりしこと
- (三) 閉塞作戦の計画並に実施は少々不徹底なりしこと

吾等は是等成功竝に失敗の蹟に鑑み日米開戦の劈頭に於て極度に善慮して勝敗を第一日に於て決するの覚悟を以て計画並に実行を期せざる可からず

(一) 敵主力の大部真珠港に在泊する場合には飛行機隊を以て之を徹底的に撃破し且同港を閉塞す

(二) 敵主力真珠港以外に在泊するときも亦之に準ず

之が為に使用すべき兵力及其の任務

(イ) 第一、第二航空戦隊 (已むを得ざれば第二航空戦隊のみ)

月明の夜又は黎明を期し全航空兵力を以て全滅を期し敵を強 (奇) 襲す

万一布哇攻撃に於ける我損害の甚大なるを慮りて東方に対しては守勢を採り敵の来攻を待つが如きことあらんか敵は敢然として一挙に帝国本土の急襲を行い帝都其他の大都市等を焼盡するの作戦に出でざるを保し難し

若し一旦此の如き事態に立至らんか南方作戦に仮令成功を収むるとも我海軍は輿論の激攻を浴び爾後の作戦に非常の障碍を生ずべく且国民志気の低下を如何ともする能わざるに至らんこと火を觀るが如し

(浦塩艦隊の太平洋半周に於ける我國民の狼狽は如何なりしか 笑事にはなし)

## 2, 旅順口奇襲作戦の経緯 (「極秘明治三十七八年海戦史」防衛研究所戦史研究センター蔵)

【日露開戦時の海軍軍令部の作戦方針】 1905 年 1 月

今日の如く露の艦隊旅順口、浦潮斯徳の二方面に分れ、而も其の戦備未だ固からざるに際し、之を急襲するの利なるは固より論を俟たず、蓋帝国が戦争終局の目的を達し得ると否とは実に開戦の劈頭先ず機先を制すると否とにより決す

第一計画は露国艦隊旅順口並に浦潮斯徳方面に分れ、其の警衛未だ全からざるに際し、我より進んで機先を制せんとするものなり

【東郷連合艦隊司令長官の作戦計画】 1904 年 12 月

先ず開戦の布告ありて然る後始て艦隊に行動起すべき命令下るものとして立案せるもの

廟議愈愈開戦と決すれば敵に余り警戒を加へざるうち先ず駆逐隊八口浦迄派遣し置き敵艦隊の動静を探りその旅順口外に碇泊せるもの若くは大連湾に在るものを知らば之を急襲せしめて開戦の布告に代ふるを上策と思惟す

【軍令部と連合艦隊の齟齬】

(東郷) 一令の下第一第二駆逐隊をして旅順口港外敵艦隊を急襲撃せしむるの目的を以て予め該兩隊…を八口浦まで派遣し置きたし其の時期は主力出発より少くも二日前ねるを要するか故にその御含にて…主力発進を命せらるゝ様希望す (1905 年 1 月 31 日)

(伊集院軍令部次長) 第一第二駆逐隊の旅順港外敵艦隊を急襲するは発令後第何日の予定なるや又天候等の為め其の襲撃を実行すること能はずとすれば次に第一撃を敵に加ふるは何隊にして其の日取は第何日になるへきや返電を乞う (2 月 1 日)

(東郷) 第一第二駆逐隊旅順口急襲は発令より第二日の夜より翌朝黎明迄の筈天候の為めに此の計画通りに実行し得るときは其の風き次第矢張第一第二駆逐隊をして実行せしむるの考なり (2 月 2 日)

(伊集院) 最初の打撃を露国艦隊に加ふるの時期は外交上の最期の手続を取るに至大の關係を有す返電に依れば天候の如何に依り其の時期確定せざるか如し第二日の夜駆逐隊の襲撃出来ざる場合には翌朝戦隊を以て攻撃せられるや前段の主意に基き可成確實の時機を回答あらんことを希望す

(東郷) 我か艦隊を敵の強勢なる海岸砲台火の下に暴露せしむるは本職は戦略上寧ろ最後の手段と考え居れり故に其の砲台援護の下に在る艦隊を攻撃するにも成るべく戦隊を用ひず駆逐隊の夜襲に依らんとす其の時期は天候の為に左右せらるゝことは免れざるも先づ第二日夜に実行出来されは第三日の夜は出来るものと予期して外交上の手続を取られては如何 (2月3日)

#### 【その後の推移】

(伊集院) 外交上最後の手続を為すと同時に艦隊発進の命令を下ることに決定されし故に主力発進二日前に第一第二駆逐隊等を八口浦まで進め置き急襲撃を為すの策は自然変更の必要あるべしと考ふ (2月4日)

(東郷) 連合艦隊は本日順次に当地を発し、八日午前八時大青島付近に達し、直に旅順に向ひ前進、其の夜第一駆逐隊、第二駆逐隊、第三駆逐隊をして旅順港外…索敵襲撃せしめ、第一戦隊、第二戦隊、第三戦隊は迂路を取り、九日朝旅順港前に現れ、威力偵察を試み、十日牙山湾に入る (2月6日)

おわりに

司馬遼太郎『坂の上の雲』より

「明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。産業といえば農業しかなく、人材といえば三百年の読書階級であった旧士族しかなかった。この小さな、世界の片田舎のような国が、はじめてヨーロッパ文明と血みどろの対決をしたのが、日露戦争である。

その対決に、辛うじて勝った。その勝った収穫を後世の日本人は食いちらかしたことになるが、とにかくこの当時の日本人たちは精一杯の智恵と勇気と、そして幸運をすかさずつかんで操作する外交能力のかぎりをつくしてそこまで漕ぎつけた。いまからおもえば、ひやりとするほどの奇蹟とっていい。」